

語釈：インターネット Twitter 上でみる Trump 前米大統領の英語 (33)

(A Basic Way of Reading Trump-Language)

後 藤 寛

今回はアメリカの健康保険制度(HealthCare Plan)に関するものを2例扱ってみたい。

- (1) ... The Republicans are developing a really great HealthCare Plan with far lower premiums (cost) & deductibles than ObamaCare. In other words it will be far less expensive & much more usable than ObamaCare. Vote will be taken right after the Election when Republicans hold the Senate & win back the House. It will be truly great HealthCare that will work for America ... (April 1, 2019)

▲ (3回に分けて書かれた長い tweet であったので、ここでは破線部を省略し1つとした)。アメリカの医療費が昔ながらに大変高いことはよく知られるが、これは2020年11月の大統領選へ向けた Trump 大統領の心の中の思いで、当初からの公約の1つでもあった。

「共和党は実に素晴らしい健康保険制度を考えている、Obama 大統領(当時)のものより保険料が安く自己負担額が少ない、共和党が上院過半数を維持し、下院で過半数を回復した選挙(大統領選)直後に採決をする、米国に実に良い健康保険制度だ」が内容。

太線の HealthCare の health の形容詞形 **healthy** は Basic 語なのであるが、これは形容詞のプラス α Basic 語 *holy* (神聖な) と同系である点には注目されておいてよい。健康であることは「聖なること」で、神がかった意味が背景にもある。「完全であること」の意味でもあり un-Basic 語の whole (全体・完全な)、wholesome (健康な・健全な)、holiday <*holy* + day (休暇)、Halloween {*hallow* (= *holy*) + *een* (< *evening* = *early night*)} (万聖節・ハロウィーン) [*evening* はプラス α Basic 語]、hail (絶賛する・歓迎する) などすべて同系である〔拙著(2016)「松柏社」、第二部、例(129)参照〕。

また、Basic 語 **care** は un-Basic 語 *caress* (愛撫する)、*charity* (慈善・慈善行為)、*cherish* (世話をする・育てる) などと同系。

太線の Basic 語 **true** + **-ly** は元々は「木・樗(かし)の木」のことで、「堅いこと、信頼すること」の意味にも拡張した。PIE etymon の音素形 /TRE/ から Basic 語 **tree**, **tray** が生まれた。un-Basic 語では *trunk*, *trust*, *truce* (休戦・停戦) など同系。休戦・停戦の *truce* の背景には堅い信頼関係が必要となる〔同上拙著、第二部、例(34)参照〕。

- (2) I was never planning a vote prior to the 2020 Election on the wonderful HealthCare package that some very talented people are now developing for me & the Republican Party. It will be on full display during the Election as a much better & less expensive alternative to ObamaCare. This will be a great campaign issue. ... (April 3, 2019)

▲ (これも長い tweet であったので後半部は省略した)。内容は上の(1)ともつながっていて、健康保険法案の採決は2020年11月の大統領選の前ではなく後であり、選挙期間中にすべて出しこれを重要な選挙運動での争点とするという Trump 氏の心の中の思いであった。

文中で *prior* (前) と *alternative* (代替) が共に *to* と共起する感覚をつかみたい。

太線語 *display* は PIE の音素形 /PLEX/ (/PLY/) からで、[pl] の音は「折りたたむこと」の意味をもつ。*display* は {*dis* (= *opposite*) + *play* (= *fold*)} で「広げて、見せ示すこと」。

Basic 語 **simple, complex**、プラス α Basic 語 *multiple* (倍数) など、un-Basic 語 *imply, comply, apply, reply, employ, implicit, explicit, deploy* (配置する)、*pleat* (ひだ・プリーツ)、*appliqué* (アップリケ) などは同系〔同上拙著、第二部、例(113)参照〕。

太線語 *during* の原義は「持続すること」で *endure, duration, etc.* は同系。

太線語 *issue* は一般の英和辞典では「ラテン語 *exire* (出て行く) より、初出 14c」のように記されるが、*issue* の本来のルーツは把握できない。原義はるか古 (いにしえ) の有史以前の印欧祖語民族の言語(PIE)までさかのぼることで根っから把握できる。*issue* は、たとえば *perish* (消滅する) などとも同系であるがどのようなつながりか？

issue の意味は辞書に①発行・出版物、②物資の支給・配給、③放出・流出(物)、④問題・論争点、⑤結果・結末、⑥子・子孫などとして示される。これら①～⑥を根拠なしで頭から覚えようとするのは泥縄式で、一般にそのような学習がなされてもいるのが現実だろう。何かが「飛び出してくること」のような意味が *issue* の本来の語感と関わる。

issue の祖語の語根音素形 PIE etymon は /EI/ が定説で、原義が「出ていくこと(to go)」である。/EI/ 中の母音 [i] に特に注目するとよからう。たとえば筆者が関心をもつラテン系スペイン語で *ir* は *to go* の意味である。この *issue* の英語同系語にはラテン系の *exit, itinerary, transit, visit* などきわめて多い (*visit* は {vis (= to see) + it (= to go)} である)。

これらの語はすべて [it] の音 ([i] + [t]) をもつ。また、*issue* [ɪʃu:] の [ɪʃ] の音をもつ語には *initial, ambition* などがあり、やはり同系語。もう見えてくる。上で引き合いに出した *perish* (消滅する) も [ɪʃ] をもっていて *perish* {per (= through, complete) + ish (= to go)} で同系語なのである。関連して *perishables* の意味は？ ネイティブにはすぐ分かるが「生鮮食料品」のことである。腐りやすいわけである〔同上拙著、第二部、例(107)参照〕。

では *issue* と同系の Basic 語はないか？ であるが、[ɪʃ] の音をもっているプラス α Basic 語 *transmission* が実は同系。もちろんこれの動詞形の un-Basic 語 *transmit* などは [ʃ] が [t] として [it] の音をもち同系ということになる。他に多くの同系語が一括される〔このあたりは同上拙著、第二部、例(33)、(107)の解説、第三部 p.198 参照〕。

いずれにせよ、英語のほぼどんな語もたとえその語が未知であっても Basic 語 (本体の 850 語と α の 654 語 = 1,504 語) をよりどころとするとともに段落テキスト文の意味推理の方法・要領を会得すれば、解き明かせられるはずだと考えてよい〔段落テキスト文の意味推理(reasoning)の方法などに関しては同上拙著、第三部(pp.173-223)参照〕。

ただし、Basic が理論的に優れきわめて有効なものではあっても、大きな欠点・目に見えない盲点もある。Basic は英語という言語の魂であり、奥義であるがゆえ、誰にも簡単に修得できる言語体系ではない。C. K. Ogden は Basic を国際補助語(international second language)とする思想を展開したが、そういう言語体系であれば老若男女、誰もが容易に修得できてよいはず。しかしそうは問屋が卸さず、きわめて難しいのであり、目に見える辞書(dictionary)ではなく目に見えないメンタルな辞書(mental dictionary)、すなわちレキシコン(lexicon)として Basic を内在化(internalize)させるまで習熟するには相当な年季がいる。片手間で取り組んでいて身につくものでは決してない。

実はこの入門はできても出門のできない Basic の欠点・盲点のゆえに神秘的な魅力を筆者は感じる。そして object language (対象言語) の English を根っから見定めるため、metalinguistic theory (メタ言語理論) として *Básic English* の正体を徹底究明したくさせる。Basic 追究の過程に「もう森羅万象ほぼ何でも解き明かせ、Basic で言える」という心境になるレベルがあるが、筆者自身は自分の能力以下のことを気楽に他人に教

えることより常に自分のため、自分の能力より上を求め「学ぶこと」により興味を抱く。

Basic 実践の一方法 GDM も対外的には所詮は背景の言語哲学が問われるが、自修本としては優れる EP 本に基づき I. A. Richards らのように Basic を direct method で、単発的・部分的ではなく、初頁から最終頁まで(from cover to cover)を段階式体系(grading system)として意味論(semantic theory)的に実践するのは日本人などには無理がともなう。和風ものとは別の本来の「Basic の GDM 実践」に関する私見は本会 *Year Book* No.71 (2019)でも示したが、教室空間から一歩外へ出て目には見えない心の中の心理描写はどうだろう？本連載での文例は物理的にどれも目には見えない。本会の GDM は趣向的に女性向きとなっていて、圧倒的多数が女性会員である。学習者の年齢からは扱い方に Mickey Mouse 風の幼さも漂うが、学力低下につながらないか？ ‘the shortest way to English’と銘打っているなら手早くもいきたい。日本的な手などの動作(kinesics)にも洗脳性を感じる。盲信は危険。Basic 思想は language control であり、mind control ではない〔Richards, I.A. & Gibson, C.(1974) *Techniques in Language Control* 参照〕。

手などの動作と言え、アメリカ手話言語 ASL (American Sign Language)をネット上で教える Bill Vicars 氏などの顔表情・手の gesture は楽しく、まさにアメリカ人のもの。日本人が真似ても不自然となる。上記、Harvard 大学の研究者 I. A. Richards らは主に 1940 年代半ばから 50 年代まで EP 本の元版で元来 self-teaching (独習) 用の *The Pocket Book of Basic English* (1945)に基づき、英語の非母語話者を対象に Basic を教える試みをしたが筆者にはとても本当にはやれない実践であるし、やりたいとも思っていなかった。“I am a Basic English learner, not a teacher teaching it in the GDM way.”

理論としての Basic 方法論に関しては 90%は妥当であると個人的には考えている。その 90%の妥当性等は、前回触れた拙稿「BASIC ENGLISH のレキシコン — 旧語表から新語表へ」〔研究紀要 No.15 (2007), pp.1-11、日本ベーシック・イングリッシュ学会 (名称は当時)〕などで Basic の未踏の世界に参入し、かなり本質的に説いたつもりでいる。

.....
試問 **段落文誤文訂正**：誤文訂正の意義、その有益性に関しては本連載(30)で触れたが、ここで前回(32)で扱った tweet 文を用いて試問とする。下に提示する段落文には瞬間におかしいと感知したい箇所が 1 つある。この 1 箇所の誤りはどこか？

... Mexico must stop illegals from entering into the U.S. through their country and our Southern Border. ... If Mexico doesn't immediately stop ALL illegal immigration coming into the United States through our Southern Border, I will be CLOSING the Border, or large sections of the Border, next week. ...

文中の‘enter’ (= to get into)という語は、たとえば enter into negotiations with (～と交渉を始める)、enter into a contract with (～と契約を結ぶ)、enter into further details (さらに詳細な説明をする)など、目には見えない抽象的空間内へ入るという意味では into と共起する。しかし上例のように現実的な空間内に入る意味では into は起こらない。

なお、最初の文に stop illegals from entering ... とあり 2 番目の文には from がないが、stop や prevent は略式では後ろの from は省略されもする。from の有無は問題ない。正解は 1 行目の entering の後ろの into の削除である〔前回(32)の(2)参照〕。

段落文誤文訂正は discourse coherence (談話文の意味的結束性) と関わる taxemics/tagmemics (談話文特性素論) の範疇で、音声面も含めた総合的な見方となる。